

# Dr. ジーアの My カルテ

全農家畜衛生研究所  
クリニックセンター



## 哺乳子豚の保温対策

自己免疫が十分に発達していない哺乳子豚は、環境への適応能力も低いです。冬場には腹冷えを起こしやすく、下痢による発育停滞で後の発育にも大きな影響を及ぼします。今回は保温対策のポイントについて紹介します。

### ●新生子豚を濡れたままにしない

新生子豚は脂肪の蓄積が少なく、一方、水は熱伝導性が高いため、子豚を生後濡れたまま放置すると体温低下を引き起こしやすくなります。

このため、分娩前からコルツヒーターやガスブルーダーを母豚の後ろに設置して、新生子豚は生後すぐに乾燥・保温できるようにしましょう。また、分娩介助の際には清潔なタオルで子豚の体表の水分を拭き取る、乾燥パウダー資材を使用する事も効果的です。

### ●哺乳子豚への局所保温

分娩房では母豚と哺乳子豚が同居していますが、各育成過程で豚の適正な環境温度は異なります(新生子豚34℃、哺乳子豚28~25℃、母豚10~15℃)。

そのため1つの空間で室温を設定すると、母豚に暑すぎる環境では食い止まりなどが発生しやすくなり、逆に哺乳子豚に寒すぎる環境では下痢や圧死などが増えやすくなります。

従って、室温は母豚に合わせ(10~15℃)、哺乳子豚に対してはコルツヒーターなどによる局所保温を行います。しかし、暖かい空気(暖気)

は上昇するため、豚舎の構造によっては効果的に保温ができない場合があります(写真1)。そのような場合は蓋のついた保温箱を設置すると、暖気を逃さずに保温箱内の空間全体を暖める事ができます(写真2)。

### ●哺乳子豚の腹冷えに注意

哺乳子豚にとって腹冷えは大敵です。分娩房の子豚スペースにはゴムマットなど熱伝導性が低い素材を敷くと腹冷え対策になる事があります。またピット式の分娩舎では、スクレイパーの出口から冷気が侵入して、哺乳子豚に直接当たってしまう場合があります。このような時はスクレイパーの出口にビニール

のすだれを設置して、冷気の侵入を防ぎましょう。

カーテン管理の分娩舎では、カーテン下からの冷気の侵入には注意が必要です。冷気が吹き上がって哺乳子豚の腹冷えを引き起こしている場合は、2重カーテンにして哺乳子豚に冷気が直接当たらないようにする対策が必要です。

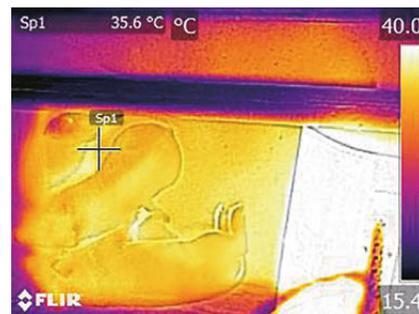
豚は環境の変化に敏感で、不快であればすぐに行動や状態に表れます。各々の農場の豚舎構造や地域の環境によって分娩舎の保温対策は変わってきます。普段から豚の行動を観察しながら対策する事が重要です。

写真1.コルツヒーターのみの場合



熱源に近い部分のみがスポット的に暖められている

写真2.コルツヒーターと保温箱を使用した場合



暖気を逃す事なく箱内の空間全体を暖める事ができる

※写真1、2いずれもサーモグラフィにて計測